

片輪車という小歌—妖怪の母体としての言語—

今井秀和

一、片輪車とは何か

現在、一般に「片輪車」と言えば、什器や着物の柄などとして広く用いられている意匠を指すことが多い。この意匠は、車輪の下半分が描かれなかったり、もしくは波などによって隠されていたりするものであるが、そもそもは牛車などの車輪が乾いてひび割れるのを防ぐ為、水に浸けている時の形を凶案化したものだという。その成立は平安時代であり、この意匠を施された「片輪車螺鈿手箱」（平安時代後期）、「片輪車時絵螺鈿手箱」（鎌倉時代）はそれぞれ国宝に指定されている。

片輪車という言葉はほかに一輪の車や、片方の車輪が外れてしまった車のことも指す。意匠としての片輪車が一輪の半分としての意味を持つのに対し、こちらは二輪の内の一輪という意味を持っているわけである。また片輪車という言葉が

指すものの中には、非常に変わったものもある。それは近世の怪談奇談集『諸国百物語』『諸国里人談』などに登場する、片輪車と呼ばれる妖怪的な存在である。

これは、人間に災厄をもたらす厄神として描かれるのだが、話によっては和歌の威力によってその難を逃れることができるという特徴を持っている。川太郎除けなど、日本には妖怪の害を避ける為の呪文が様々伝わるが、それらの多くも和歌の形をとっている。その為見落としがちなのだが、実は片輪車が和歌で退けられるのにはもっと深い理由があった。和歌で退けられる話形の片輪車に関して言えば、その話の成立自体に和歌が関わっているのである。当論考では妖怪的存在としての片輪車の成立と展開、また何故和歌と結びつけられたのかなどを追求していく。

まずは延宝五年（一六七七年）四月刊行の作者不詳『諸国百物語』、寛保三年（一七四三年）正月刊行の菊岡沾涼『諸

国里人談」から、片輪車に関する部分を挙げる。

「九 京東洞院かたわ車くわまの事 京東洞院通とどろにむかし片輪車かたわくるまと云ふばけ物ありけるが、夜なく下しもより上かみへのぼるといふ。日ぐれになればみな人をそれて往来わうらいする事なし。ある人の女ばう是れを見たくおもひて、ある夜、格子かうしのうちよりうかゞひるければ、あのごとく夜半すぎのころ、下しもよりかたわ車のをとしけるをみれば、牛もなく人もなきに車の輪ひとつまわり来たるをみれば、人の股もものひききれたるをさげてあり。かの女ばうおどろきおそれければ、かの車、人のやうに物をいふをきけば、「いかにそれなる女ばう、われをみんよりは内に入りてなんぢが子を見よ」と云ふ。女ばうをそろしくおもひて内にかけ入りみれば、三つになる子をかたより股ももまでひきさきて、かた股ももはいづかたへとりゆきけんみへずなりける。女ばうなげきかなしめどもかへらず。かの車にかけたりし股ももは此子が股ももにてありしと也。女の身とてあまりに物を見んとする故也」(『諸国百物語』太刀川清氏校訂『百物語怪談集成』(国書刊行会 一九八七年七月))

「○片輪車 近江国甲賀郡に、寛文のころ片輪車といふもの、深更に車の碾音して行あり。いづれよりいづれへ行をしらず。適にこれに逢ふ人は、則絶入して前後を覚えず。故に夜更ては往来人なし。市中も門戸を閉て静る。此事を嘲弄などすれば、外よりこれを罵りかさねて左あらば祟あるべしなどいふに、怖恐て一向に声も立ずしてけり。或家の女房、これを

見まくほしくおもひ、かの音の聞ゆる時、潜に戸のふしどより覗見れば、牽人もなき車の片輪なるに、美女一人乗たりけるが、此門にて車をとゞめ、我見るよりも汝が子を見よと云におどろき、閨に入て見れば、二歳ばかりの子、いづかたへ行たるか見えず。歎悲しめども為方なし。明けの夜、一首を書て戸に張りて置けり。

罪科は我にこそあれ小車のやるかたわかぬ子をばかくしそ

その夜片輪車、閨にてたからかによみて、やさしの者かな、さらば子を帰すなり。我人に見えては所にありがたしといひけるが、其後來らずとなり。」(『諸国里人談』『日本隨筆大成』第二期第二四卷(吉川弘文館 一九七五年一月))

「牛もなく人もなきに車の輪ひとつまわり来たる」(『諸国百物語』)、「牽人もなき車の片輪」(『諸国里人談』)とあることから、どちらの場合もこれが牛車など大型の乗り物の片輪を指していることが分かる。ほかにも双方の話に共通する点が多いが、「片輪車」と呼ばれる妖怪的存在が出没する土地、またその性別が異なっている。『諸国百物語』においては文中にその性別を示すような語句は見当たらない。しかし片輪車の言葉使いや挿絵から、それが男であったことが分かる。一方『諸国里人談』における「片輪車」は、「牽人もなき車の片輪なるに、美女一人乗たりこる」という姿をとっている。片輪車の通る日は、戸を固く閉めて決して通りを覗いては

いけないという禁忌があり、それを破った女が子を攫さらわれてしまうという筋書きまでは、双方共通の話形である。しかし、『諸国百物語』の片輪車（男）はその子を引き裂いて殺してしまうが、『諸国里人談』の片輪車（女）は、母親が悲しみと後悔を込めて詠んだ歌によって怒りを鎮める。そして子供を母親の元へと返す。どちらの話も、一見して『今昔物語集』などにある、百鬼夜行にまつわる話の影響を感じさせる筋書きである。ただ、結末が悲惨な結果に終わる話形と、難を逃れる話形とに分かれている。

『今昔物語集』（巻第十四第四十二話「依尊勝陀羅尼験力遁鬼難語」）、『大鏡』（第三巻「右大臣師輔」）などにおいて百鬼夜行の難を逃れる場合を見ると、尊勝陀羅尼（魔除けの経）などを用いていることが分かる。また鎌倉期の『拾芥抄』には、百鬼夜行除けの三十一文字の呪文（意味不明の和歌）が載る。『諸国里人談』の片輪車（女）の場合も和歌で難を避けてはいるが、ここでの歌は呪文的なものではない。子を奪われた女がその心情を歌に込め、結果的にその想いが片輪車に通じた、という形になっている。従ってこれを、いわゆる歌徳説話（優れた和歌を詠んだ結果、詠み手周辺の状況が好転する説話）の系譜に位置付けることができよう。一見すると百鬼夜行の末裔にしか見えない片輪車だが、『諸国里人談』の片輪車（女）が歌徳説話の形をとって語られていることには、相応の理由がある。これについては追々解説し

ていく。

『諸国里人談』とほとんど同じ話（つまり女の片輪車）は、貝原益軒（一六三〇～一七一四年）が晩年に至るまでに集めた話をまとめた『朝野雜載』巻之十二（益軒全集刊行部編「朝野雜載」『益軒全集』八巻（隆文館 一九一一年七月））にも収録されている。また、同じく『諸国里人談』と同様の話が、寛政七年（一七九五年）成立の津村涼庵『譚海』にも載る。こちらは「信州某村に片輪車と申神まします」「日本庶民生活史料集成」（三一書房 一九六九年十一月）とあるように、舞台が信州となっている。

津村涼庵『譚海』の成立は『諸国里人談』刊行後五十年以上を経ており、ここに載る内容は『諸国里人談』の片輪車の話が変化を遂げたものと考えられる。一方、『朝野雜載』は貝原益軒生前の記録をまとめたものであるが、益軒の没年は一七一四年であり、『諸国里人談』刊行の一七四三年より三十年ほど前である。さらに『朝野雜載』『諸国里人談』の相違点は、次にあげる歌の部分（傍線部）のみであり、双方はほとんど同じ内容を持っている。「罪科は我にこそあれ小車のやるかたわかぬ子をなくしそ」（『朝野雜載』）、「罪科は我にこそあれ小車のやるかたわかぬ子をばなくしそ」（『諸国里人談』）。

『朝野雜載』は益軒没後、養嗣子の和軒（常春）がその遺稿をまとめた写本とされる。同書に載る片輪車の話が確かに

益軒生前の資料をもとにしたものであれば、『諸国里人談』は直接間接は不明にしろ、何らかの形でその影響を受けたか、もしくは双方に先行する別の資料があったことになる。ただし、いずれにしても一般に広く読まれたのは当然版本たる『諸国里人談』のほうであるし、内容的に考えても双方の相違点は前記一点のみである。よって当論考では、特別な場合を除いて片輪車(女)について書く際に、これを『諸国里人談』の片輪車とする。

二、片輪車の図像について

さて、『諸国百物語』と『諸国里人談』、これら二種類の片輪車の影響を経て書かれた(描かれた)のが、安永八年(一七七九年)刊行の鳥山石燕『今昔続百鬼』の「片輪車」、また「輪入道」である。これらは、先行する二つのテキスト(『諸国百物語』・『諸国里人談』)の内容を元に、石燕が新たな解釈を加えて図像化したものである。石燕は輪入道の図に添えられた詞書に「輪入道 車の轂こしきに大なる入道の首つきたるが、かた輪にてをのれとめぐりありくあり(後略)」(『鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集』(角川書店 二〇〇五年七月))などと記し、あたかもそれが片輪車に近似した別種であるかのような扱い方をしている。

しかし輪入道とは、石燕が片輪車の図像から派生させたものなのである。すでに知られているように、石燕描く輪入道

は『諸国百物語』における片輪車図像を参考にしていて。つまり最初に描かれた片輪車は、『諸国百物語』のもの(男の坊主頭が車輪の中心にある図像)であったが、その図像は後に石燕によって加工され、「輪入道」という別の名を与えられることになるのである。

では、石燕描く「片輪車」の図像は、一体どこからやってきたものだろうか。高田衛氏は、輪入道と同じく『諸国百物語』の「片輪車」を参考にしたのだろうとする(高田衛氏監修『鳥山石燕 画図百鬼夜行』(国書刊行会 一九九二年十二月))。しかし、『諸国百物語』の「片輪車」と石燕描く「片輪車」との間には、車が描かれていること意外に共通点を見出せない。石燕描く「片輪車」には、これといったモチーフはないのか、それとも何かを参考にして描かれたものなのであろうか。結論から言えば、石燕描く「片輪車」のモチーフは『熊野勸進十界図』や『地獄極楽図』などの中に求めることができる。これらの絵画の中に小さく描かれている「火車」の図像を参考にして、石燕は自らの「片輪車」図像を作り出したと思われるのである。これは火車(鉄車)などと呼ばれ、地獄の獄率が曳く車である。現世に現れて人を攫い、地獄に連れ去るともいう。

この火車と、石燕描く「片輪車」を比べてみれば、これらが瓜二つであることが分かる。ただ、そこにはトリミング(もとの画面から不要な部分を切り取り、構図を整える作業)

などによる、図像の加工が行われている。『熊野勸進十界図』や『地獄極楽図』などに描かれる火車の場合、車を曳く動作主は牛頭鬼や鬼などであり、その車に乗る女はあくまでも受動的な「被害者」である。しかし、『今昔続百鬼』の片輪車図像の場合、そこに車を引く者はいない。女は車と一体化した妖怪的存在となっている。トリミングによる引き算の加工によって、女は受動（被害者）から能動（加害者）へと変化を遂げているのである。

では何故、石燕は『諸国百物語』にすでにあった図像を用いて「片輪車」を描かなかったのか。この図像を参考に絵を描き、それにわざわざ「輸入道」なる新たな名まで与えていることから、石燕は『諸国百物語』の「片輪車」図像自体は気に入っていたのだろう。しかし、それを「片輪車」として描くことはしなかった。おそらく石燕は、『諸国里人談』における「片輪車」のほうに、より高い物語性を感じていたのである。なぜならそこには「子を攫う女」という、より陰惨な物語性に加えられているからである。死んだ女が子を抱いて現れる「姑獲鳥うづつめ」を始め、「女と子」という組み合わせは、怪異譚のひとつの定番パターンなのである。

石燕以降、片輪車の図像は絵入り狂歌本や歌留多の絵柄（「京」の札）などとしても登場することになるが、それらは大概、石燕による絵の強い影響下にある。後世の片輪車図像に影響を与えた石燕の絵は、片輪車、輸入道、そして朧おぼろぐるま車

の三種類。この朧車も、石燕が片輪車から派生させたものと考えられる。背景の半月は意匠「片輪車」の暗喩であり、朧車とはボロ車にかけた名なのである。またその詞書きには、車争いの遺恨によって生じたものかと書かれるが、これは『源氏物語』葵巻における車争いのエピソード、さらには月とあいまって同書の登場人物「朧月夜」を想起させる仕掛けとなっている。

石燕の影響を受けつつも比較的独自性が強いのは、文化三年（一八〇六年）刊、山東京伝作・歌川豊国画『善知やすかた安方忠義伝』に描かれる二つの片輪車図像であろう。その内のひとつは鬼女の下半身が車輪になっており、もうひとつは片輪の御所車に乗った鬼女の姿をとる。この内、鬼女の下半身が車輪になっている図は葛飾北斎にも影響を与えたようで、北斎の画稿中にはこれによく似た図が存在する（『肉筆 葛飾北斎』p.88（財団法人北斎館 一九九六年四月））。

『善知安方忠義伝』における片輪車の話は、『諸国百物語』と『諸国里人談』の話形を組み合わせて、読本の本筋に組み込んだもの。出現するのは女の片輪車だが舞台は京で、歌を詠んでも子は食い殺されてしまう。また時代が下れば、これまで紹介してきたものとは大分様相を異にする片輪車の図像も登場する。

寛保のころ、あやしきものを見たり。その形は人にして、年の頃廿あまりなるが髪かみの結ひやう、首くびの際よりまげの

末まで耆尺五六寸、伊達もやうの下着袖口より五六寸計長く、羽織は地を引くばかりに五尺あまりの紐を附けた。黒塗りの下駄をはきたりしが、羽織の紐ときく足駄の齒にからみて、是をはづさんとすれば、髪の毛のまげ木の枝にかゝり、袴は下駄の齒のかくるゝばかりなりければ、行きなやみたる風情なり。脇指は二尺五六寸もあらんと覚ゆるに、刀のやうなるものをわきばさみたれども、立てざまに差したれば、柄は脇の下にかくれて見えず。棒やらん。刀やらん。おぼつかなし。手には八尺あまりの煙管を持ちたり。そのあやしさいはんかたなし。家にかへりてこれを図して、是は何といふものぞと人にとへども、さらにしる人なし。異国の人か。化物か。鳥獣虫魚の類ならば、本草綱目にやあらんと医師にとへども、斯る者は知らずと答ふ。三才図絵にやあらんと、普く尋ねもとむれども似たるもの更になし。或人、是は世に云ふ風の神ならん。その故は、近年文金風、あるひは豊後節風などいふ。前々よりも辰松風、助六風など、みな風の字を氏にして、采王、大王の風、庶人の風といひし、廢人の中にも至りて悪き風なり。若しこれに逢ふもの、風を引き煩ふのみならず、心の臓に入りて狂気のやうになり。身を亡し、家を破るとなり。偕は道にてあはんをさへ心うきに、家の内へ来らんことは、いと心うかるべし。かやうのあやしきものは、和歌にて鎮むと云ふこと、

むかしより聞き伝へ侍りければ、一首の歌を詠じてこれをまじなひける。

道しらぬ友にひかるゝ小車のこれも片輪のたぐひなるらん

あはれぞと見るさへうしや小車のかたわとて世に引く人もなし

(中略) 文政八年四月朔 好問主人謾書(「兔園小説」日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第二期第一卷(吉川弘文館 一九七三年十一月))

『兔園小説』は、奇事異聞を披露する会「兔園会」における記録をまとめたものである。兔園会は、滝沢馬琴・山崎美成やまざきよしを中心として毎月一回開かれていた。「寛保のころ、あやしきものを見た」好問主人(好問堂)とは山崎美成のこと。寛保は一七四一年から一七四四年までであるが、この文章が記録されたのは文政八年(一八二五年)のことである。

ここでは、若者の異装を否定する為、流行の髪形を指す「○○風」にかけて、若者を風の神(流行病)と呼んでいる。この文章には図が付されているが、そこには刀を落とし差しにして、高く結った鬘を木の枝にひっかけた若い武士が描かれている。図には「風神図 一名片輪車とも云ふといへり」と書かれているが、風の神も片輪車ともに災厄をもたらす存在であることから、「風神」または「片輪車」と呼んでいるのであろう。つまり、ここに書かれている(描かれている)

片輪車とは、若者の風俗を理解できずに揶揄する、単なる年長者の皮肉なのであるが、ここにおいても歌で片輪車を鎮めるといふ符丁が記されている点は見逃せない。

三、妖怪「片輪車」成立の背景

これまでも述べてきたように、片輪車（とくに女）と歌とは密接な関係にある。この章では、その関係性の背景に迫っていく。まずは、『諸国里人談』を初めとする歌徳説話としての片輪車に関して、その歌の内容を見る。『諸国里人談』において歌われる歌は、「罪科は我にこそあれ小車のやるかたわかぬ子をばかくしそ」というものであるが、歌の内容に關し、多田克己氏の訳・解説を引く。「罪科は私にあるのだから、小車の動かし方もわからない幼児を隠さないでおくれ。文中に「遣る《牽引する》片輪」の意が掛けられている」（『絵解き 画図百鬼夜行の妖怪』『怪』第九号（角川書店 二〇〇〇年九月））

歌の内容については多田氏が解説する通りだが、実はこれには、元になった別の歌が存在しているのである。前出『兎園小説』において異装の若者を「風神」や「片輪車」として揶揄していた山崎美成であるが、天保八年（一八三七年）に成立した彼の随筆集『海録』には、片輪車という小歌が収録される。これは明暦三年（一六五七年）刊行の山岡元隣『誰が我身の上』、また享保（一七一六〜一七三六年）頃の教訓本

『匂ひ袋』を典拠とするものである。

「五六かたわ車と云ふ小歌 匂ひ袋（全部二冊、享保年間の刻本、男女子どもの躰を書たる教訓の書也、）云、「古き小歌にうたふたるをきけば、

「君にとがなやうらみはせまじ、やぶれぐるまでわがわるい」といへるは、かりそめの様なれども、よき言葉也、（頭書、誰が身の上（元隣記）に見えたり、明暦比の刻、）」

（早川順三郎編『海録』（国書刊行会 大正四年十一月））

『匂ひ袋』の記述の元となった明暦三年（一六五七年）刊行の山岡元隣『誰が我身の上』には、「君にとがなやうらみはせまじ、やぶれ車でわがわるいといへるは、かりそめにうたひし小歌の唱歌なれども、これ自然に『あまのかるもにすむ蟲のわれからとねをこそなかめ世をばうらみじ』といへる本歌の心にも通ふべし」（『誰が我身の上』『近代日本文学大系一 仮名草子集』（国民図書 一九二八年十二月）とある。ちなみに引用文中にある「本歌」は、『古今和歌集』卷第十五恋歌五〇七 典侍藤原直子朝臣の歌である（歌番号は『新編国歌大観』による）。

ここでの片輪車は純粹に歌としての片輪車であり、この時点ではまだ妖怪的な要素（物語性）は発生していない。妖怪としての片輪車が最初に書かれるのは、延宝五年（一六七七年）四月刊行の作者不詳『諸国百物語』においてである。

その後『諸国里人談』が刊行されるが、同書において片輪

車（女）を鎮めた歌は「罪科は我にこそあれ小車のやるかたわかぬ子をばかくしそ」である。これは『誰我身の上』などで紹介された「かたわ車と云ふ小歌」（君にとがなやうらみはせまじ、やぶれ車でわがわるい）を元にしたものと考えられる。片輪車（女）はこの歌と結びついたからこそ、歌徳説話の形式をとって語られるようになるのである。ちなみに、『誰我身の上』を書いた山岡元隣も百物語を書いている。該当書は、貞享三年（一六八六年）刊の『古今百物語評判』である。これは『諸国百物語』（一六七七年）と『諸国里人談』（一七四三年）の間に位置するが、『古今百物語評判』には片輪車は出てこない。

また、直接「片輪車」という単語こそ含まないものの、それを意識して詠まれたとおぼしき歌も少なくない。古くは、延文元年（一三五六年）に成立し、翌年勅撰に準ぜられた連歌集『菟玖波集』（良阿法師 卷一 春上）の中にそれを見出すことができる。

「一 片端（輪）にみゆる春の三日月

ゝ 小車のなかばは花に木がくれて」（『菟玖波集抄』『岩波古典文学大系 連歌集』（岩波書店 一九六〇年三月））

ここで扱われる片端（片輪）は、意匠としての片輪車をイメージの下敷きにしている。つまり、二輪の内の一輪という意味ではなく、一輪の内の半分が隠れている状態を三日月に託して詠み込んでいるのである。

この『菟玖波集』の歌を踏まえたものか、寛文六年（一六六六年）刊行の『古今夷曲集』、享保十六年（一七三一年）刊行の『雅筵醉狂集』などの狂歌集にも、類似の歌を見つかることが出来る。これらにおいても直接「片輪車」という言葉は出てこないが、それを暗示させる作りになっている。以下に、『菟玖波集』の影響を受けたとおぼしきこれらの狂歌を挙げる。

「春日山にていかにかしたりけむ梢より猿の落けるをみてよめる 器音

山猿もともに梢を落雁の車に似たるかたわとそなる」（『古今夷曲集』狂歌大観刊行会編『狂歌大観』第一卷 本篇（明治書院 一九八三年一月））

「○修行者の大雨にぬれぬる所の絵

片輪なる世はうしとの修行者や 車軸をながす雨もいとほぬ」（『雅筵醉狂集』狂歌大観刊行会編『狂歌大観』第一卷 本篇（明治書院 一九八三年一月））

どちらの歌も、「かたわ」「片輪」に「車」「車軸」が対応している。「片輪車」と歌との関連に『菟玖波集』が影響を与えていたことを裏付けるものとしては、次のような例も挙げられる。『菟玖波集』（救済法師 卷十九 雜體）には、「やぶれぐるま」を詠み込んだ次のような歌も収録されているのである。

「221 ひだるきにつのひかるゝぞ心えぬ

222 やぶれぐるまをかくるやせうし」(『菟玖波集抄』)

『岩波古典文学大系 連歌集』(岩波書店 一九六〇年三月)「やぶれぐるま」と言えば、前出の山岡元隣『誰我身の上』で「かたわ車と云ふ小歌」として収録されている「君にとがなやうらみはせまじ、やぶれぐるままでわがわるい」がすぐに想起される。この歌においては「やぶれぐるま」と「片輪車」がセットになり、交換可能な言葉・概念として存在しているが、その背景には、おそらく『菟玖波集』に収録されたこれら二つの歌があると思われる。

「やぶれぐるま」とは言うまでもなく「破れ車」であり、片輪車と同じく壊れた車を指す言葉であるが、戦国末から江戸初期にかけての記事をまとめた歴史書『當代記』(成立年不明)には、のちの妖怪「片輪車」に影響を与えたと思しき「やぶれ車」の記事が載っている。『當代記』の「やぶれ車」と片輪車の類似性については既に、香川雅信氏「妖怪図鑑——博物学と「意味」の遊戯」『江戸の妖怪革命』(河出書房新社 二〇〇五年八月)において触れられている(木場貴俊氏の教示を得て、香川氏が紹介)。『當代記』卷三、慶長十一年(一六〇六年)の記事から、その該当部分を挙げる。

「やぶれ車と云ふ変化の物京中に在之、縦は車の通音する間、見之所に、目にも不見、昔年両度如此怪異有之き、二度共に凶兆と云々(——引用者注。旧字は適宜新字に改めた)」「當代記」『史籍雜纂』第二(国書刊行会 一九一一年十一

月)

『當代記』の「やぶれ車」は京に二度出現するが、音だけで姿は見えない。そして、その出現は凶兆と捉えられている。京に出現したということ、音だけで姿が見えないこと、凶兆あるいは凶事そのものであることなどの共通点から見ても、今まで論じてきた妖怪「片輪車」、とくに『諸国百物語』の時点での片輪車(男)に関しての原型は、この「やぶれ車」にあると見て良いだろう。さらに『當代記』の「やぶれ車」が『諸国百物語』において「片輪車」に変化を遂げたことには、すでに紹介した『菟玖波集』などに詠まれた歌々からの影響があったと思われる(その時点ですでに「かたわ車と云ふ小歌」の影響があった可能性もある)。

さらに下って『諸国里人談』などになると、「かたわ車と云ふ小歌」の影響は明らかである。そこでの片輪車は女に変化を遂げ、出現場所も近江(『諸国里人談』・信州(『譚海』)など様々になっていく。また『甲子夜話三篇』六十七の二には、『諸国里人談』に書かれる片輪車(女)の話によく似た話が載っている。

「天祥庵の僧話かたる。遠州相良に平田寺と云あり。此辺に五六歳ばかりの小兒あるしが、或日鬼形の者来り、此兒ぜんせいの罪に依て、迎として来れり。門前に火車有り、これに載て返り往かんと。時の住持聞て、斯兒前罪有と雖も、冀は十四歳に及ぶまで、其罪を宥し給へと、酒詩を作て鬼に与ふ。鬼も

亦これを和して賦す。両詩とも今忘れたりと（——引用者注。旧字は適宜新字に改めた）」（中村幸彦氏・中野三敏氏校訂『甲子夜話三篇』六卷（平凡社 一九八三年十一月））

火車とは地獄の獄率が曳く車のことだが、すでに述べたように現世に現れて人を攫い、地獄に連れ去るとも言われている。ここに引いた『甲子夜話三篇』六十七の二所収の話では、鬼が火車を曳いて子供を攫いに来る。しかし鬼に許しを請うた平田寺の住持が漢詩を作って鬼に捧げると、鬼もそれに応えて詩を作ったという。

『甲子夜話三篇』を著したのは松浦静山（一七六〇〜一八四一）であり、当然『甲子夜話三篇』が成立したのは『諸国里人談』（一七四三刊）よりもずっと後のことである。しかし『甲子夜話三篇』の火車と『諸国里人談』の片輪車とを比べた場合、相互には影響関係があるように思われる。具体的に言えば、両者の間には「車」という共通要素がある。さらに妖怪的存在（火車／片輪車）による子供の誘拐に際し、保護者（僧／母）が歌（漢詩／和歌）でその難を逃れるという、歌徳説話の形式をとっているという共通点も挙げられる（『甲子夜話三篇』に関しては結末が省略されているが、鬼が応えたということは子供も助かったものとみてよからう）。

成立順から言えば、『諸国里人談』の片輪車の話が『甲子夜話三篇』の火車の話に影響を与えたことになるが、それにしては火車の話はシンプルに過ぎる。ここではむしろ逆に、

次のような可能性を考えたいところである。『甲子夜話三篇』に収録された遠州在地の伝承は、『諸国里人談』や『朝野雜載』成立以前にはすでに存在していた。そして、その火車の話の影響を受けて、両書に書かれる片輪車（女）の話が成立した。

しかし、平田寺における火車の話の成立時期が確認できない以上、ここでは相互の影響関係を指摘するに止めざるを得ない。いずれにしても、『諸国百物語』の片輪車（男）が原型となり、そこに何らかの歌徳説話と「かたわ車と云ふ小歌」が加わって、『諸国里人談』の片輪車（女）が出来上がったものと考えられるのである。